

# 島尾敏雄「死の棘」と戦争

横山信幸

「ねえ、ひとつだけききたいギモンが出てきたの。きいてもいい？ 教えて」（「死の棘」）

このようにして妻の尋問は始まる。そしてこの尋問のゆきつくところには

「おや、あたしをぶつたね。よくもあたしをぶつた。トシオがあたしをぶつた。トシオがあたしをぶつた」

妻は目をつりあげ、つかみかかつてきた。私は思わずたち上り、玄関に逃げた。

というところである。一体なぜそれまでの心やさしかった妻が、ある日突如として手厳しい糾弾者になつたのであろうか。従順であつたいままでの妻とは何者であつたのか。そして今「私」を激しく糾弾してやまない妻とは何者であるのか。そしてまたこの妻と十年間生活をともにしてきた自分とは一体何者であつたのか。「死の棘」の投げかける問題に答えるということは、これらの問題に答えるということに他ならない。

さて、これらの問題に答えるために、妻が病氣になつた原因について検討してみよう。

妻は「私」に次のように言う。

「……二時までいきつと帰ると言つて行きながら二時にその通り帰つてこなかつたじやありませんか。それじや昔のままですよ。女のところに通つていたところとどこがちがうかしら……」

「でもあたしはうらやましい。煙草一箱だつていいわ。あたしはあなたに何かプレゼントをもらつたことがあるかしら」

「あたしがそう思うのも当然ですよ。だつて十年間もあなたにだまされつづけていたんだから。」

妻が病氣になつた原因はどうやら「私」が女をつくつたことにあるらしい。この妻の糾弾を「女の嫉妬のすさまじさ」（山本健吉「戦後小説集」解説（筑摩書房））と言う人もいるが、これはあたらない。

「『ワーハーハー』とすさまじい叫びをあげ、目のくまをどす黒くした表情で夫をにらみつけて」抗議する妻の態度は、けつして亭主の浮気を責めている世間一般の妻の姿ではない。ここには、自分の存在を脅やかされ、自分を殺されたものの腹の底からの抗議の声がある。妻は「十年間もあなたにだまされつづけていたんだから」と言う。島尾の言によると、妻が「おかしく」なつたのは「昭和二十九年からである。（注1）それより十年前という昭和十九年、つまり、島尾が

④艇特攻要員として、奄美大島加計呂麻島に配属された年にあたる。とすれば、妻の糾弾は直接には「私」の浮気をきっかけとして始まる。

たのかもしれないが、その底にはもっと深い何ものかが秘められていたにちがいない。

妻の発作が静まったあと、「私」は次のような感慨を持つ。

……たたきに坐り、夫の足の甲をなでたあとで頬をおしつけ、そして涙をとめどなく流すので、ふと戦時中のことを思ってしまう。妻のふるさとの海軍基地に居た私が、いつも夜ふけに訪ねて行く、娘らしくふとついていた彼女は闇の中で私の階級章をまさぐり、軍服にさわり、しやがんで搭乗靴をなでた。その記憶は私に、この首都の片隅、裏通りの瓦屋根の下にも浜木綿のにおいがただよってきたと感じさせた。敗戦のあとのわきたつた世の中のざわめきの中で、どんな原因が重なったあとで、妻とのあいだが肉離れして行つたのかわからないが、今足もとにうずくまつて嗚咽している妻の小さなからだに、自分を通つてきたひとつのかけがえのない経歴を見ないわけには行かない。

妻とのいさかいのあとで「私」の心に浮かぶものが、あの戦争時の出来ごとであるのはなぜだろうか。そして、発作のおさまったあとと妻の仕草と、隊長であった「私」にとりすぎる島の娘の仕草とが同一であるということは何を現わしているのだろうか。妻の突然の変身と、十年前のあの戦争中の二人の関係とはどうやら無縁ではなさそうである。妻の変身の原因をさぐるために、「十年」前の世界に帰ってみよう。

五十余名の部下を率いるN浦の特攻隊隊長であった「私」には、世

界はどのように見えたか。

そして時は不気味に進行を止め、毎日の出来事は既に歴史に書かれていることばかりのように思えた。どんなことが起つても新鮮な驚きを感じなかつた。ムッソリーニが虐殺されたこともヒットラーの消失も私にはその意味が分らず、歴史年表の古い記事を読むのと変りがなかつた。（「出孤島記」）

「私」は現実感を失っている。ここで失われているのは主として時間感覚である。また「私」は空間の感覚をも失う。

高所を飛ぶ大型飛行機はそんなに恐ろしくない。南の真夏の太陽が強く照り、空は気が遠くなるほど青く、而も光を一ぱいに含んでいた。それだけの距離を置いてその飛行機は、へんに大きく感じられた。ふと私の感覚はじびれ、一切の物音は聞えなくなりその大きな空のくらげの化物のような物体が、すいすいと移動して、私の頭上の方によつて来た。（「同 右」）

ここでは、敵の飛行機は「くらげの化物」に変容されている。このような現実感、臨場感の喪失はなぜ起きるのだろうか。

ふつうわたくしたちは、自己は他者とともにある存在だと考えている。わたくしを取り巻く時間は同時に他者をも取り巻いている時間であるし、わたくしを取り巻く空間は同時に他者をも取り巻いている空間である。だから、わたくしは他者に影響を及ぼすことのできる存在であるし、また他者から影響を及ぼされる存在でもある。しかし、時間と空間に対するこういう認識が破られるときがある。それは自己が分裂したときである。たとえば、先ほどの例で言えば、現実の肉体を持った自分は、ヒットラーやムッソリーニと同じ時間と空間の中に生きている。しかし、そういう自分か

ら脱出したもう一人のわたくしが存在するようになれば、そのもう一人のわたくしにとつては、ヒットラーやムッソリーニは直接的なものではない。

このとき現実には生々しさを失うのである。さきほどの現実感の喪失は、基本的にはこのようにして成立したものである。だが、この場合、必ずしも島尾敏雄の自己が二つに分かれたと考える必要もない。島尾の自己は、現実との直接的な対応を失って後退したと考える方が妥当であろう。そして、この後退した自己は、かつて自分が直面していた現実の世界を、あるイメージに置きかえ、そのイメージを現実とみなすことによって現実を了解しようとする。先ほどの飛行機の例で言えば、飛行機に対する潜在的な恐怖感から、後退した自己は、この飛行機を「空のクラゲの化物」というイメージに置きかえ、そうすることによって現実を了解したことにしようとする。これは、 $\wedge$ 自己保全 $\vee$ の本能のあらわれの一つであるとも言える。

さて、「私」の自己を現実から後退させているものは何であろうか。それは自分が破壊するかもしれないという強い危機感である。この危機感、この場合、自分は死ぬという意識に支えられて存在する。特攻隊員としての「私」の前にはただ死があるだけであった。ところで、「私」はなぜ死のうとしているのだろうか。「私」を死に追い込んだものは一体何なのか。島尾敏雄は次のように言う。

奇妙なあきらめ。つまり生存して日常のくらしを続け得ることが  
ぼつんとすぐ真近の将来に於て絶ちきれる約束になつて私  
ち。それは誰と約束したのだろうか。(「徳之島航海記」傍点〓横

山)

いよいよ我々集団自殺者の祭典の時刻が近付いたように思われた。

我々のその行為によつて戦局が好転するとも考えられなかったが、それでも誰に対してしたか分らぬ約束を、義理堅く大事にしていたのだ。(「出孤島記」傍点〓横山)

「私」にとつては、特攻艇に乗って死地におもむくことは、「誰か」との「約束」であったのだ。これはかなり奇妙な認識である。「私」が死ななければならぬのは、現実的にはもちろん $\wedge$ 国家 $\vee$ による $\wedge$ 強制 $\vee$ があるからである。それが $\wedge$ 国家 $\vee$ による $\wedge$ 強制 $\vee$ である以上、「私」はそこから逃れることはできない。それをなぜ「私」は「誰か」との「約束」などという、主体にいくぶんか選択の余地が残されていそうな言い回しをするのであろうか。この「約束」ということは、後退した「私」の自己が使ったことばだとわたくしは思う。現実的にみれば「私」は逃れようもなく死を強制されている。ところがこの苛酷さに耐え得なくなった自己は、現実から後退し、自己の内部で、あたかも自分は自由でもあるかのように振舞おうとしたのである。いうまでもなく、これは現実的な危機回避の方法ではない。これはあくまでも主体の内部での危機回避の方法である。しかし、もしこれを現実と判断し、行動するならば、そこには大きな落とし穴が待ち構えているはずである。

このN浦の隊長は、離島の部落の人々をどのようにみたであろうか。

三

「私」は、隊員を慰問にきた部落の人々を見て次のように思う。

栄養の補給が不十分なために、みな色つやの悪い顔をそろえ、いくつつかのかたまりになつて重なり、すさまじさがあらわれた。

慰問されなければならないのはむしろどんな特権も持たずに素手で死の恐怖にさらされている彼らの方なのに、残り少ない米で餅をつき、箱を重ねて持つて来て私たちの目の前に積んだ。（「出発は遂に訪れず」）

この部落の人々のやさしさは何に對するやさしさであろうか。そして、「私」にはこのやさしさを受け入れるだけの資格があるのだろうか。この部落の人々のやさしさは、もちろん死にゆく特攻隊員の前に捧げられたものであろう。ところで、「私」たち特攻隊員は、部落の人々に対してはどのような役割を果たしているのか。もしどんな感傷も払わずにこの場面を眺めるならば、これは、離島の人々の安全に何の寄与もできないでいるある武装集団が、貧しい島民からその食料と好意とを掠奪している光景に他ならないではないか。しかも、この集団は、島民の生活を支配する△権力▽としても存在しているのである。そして、その権力の頂点にいるのがN浦隊長である。「私」に他ならない。これがこの島における「私」の客観的なあり方である。こういう「私」には、もちろん部落の人々の好意を受ける資格はない。しかし、どうやらこういう現実には「私」にはよく気づかれないようにだ。それと同じように島民にもうまく気づかれないように思える。ところが、こういう現実とは逆に、「私」はこの島の守備隊員、守護者であるという妄想にとらわれていたのではなからうか。だとすればこのくい違いは、どこかで、何らかの形で現われて来ざるを得ない。

さて、N浦の隊長さんは一人の島の娘としりあう。

「トエ」

ぼつんと中尉さんが呼びますと、

「え」

それまで眼を落していたトエは中尉さんの眼を見ました。そして彼女の運命をよみとったのです。

「私は誰ですか」

「ショハーテの中尉さんです」

「あなたは誰なの」

「トエなのです。」

「お魚はトエが食べてしまいなさい」

トエは笑いました。トエは娘らしく太っていました。いたずら盛りの小娘のように頑丈そうでした。ただ瞳がいくらかかなめを見ていてたよりの気でありました。その瞳を見たときに中尉さんは自分が囚われの身になってしまったことを知りました。（「島の果て」）

二人の愛は美しく描かれてはいるが、しかし、この出会いにはすでに問題が含まれている。この二人は、純粹に、一人の少女と一人の青年として出合ったのであろうか。「出孤島記」に次のようなところがあ

みなしごのNに、此の世の中でたつた一人の孫娘をたよりに生きている年老いた祖父をひとりだけ谷の奥の疎開小屋に移し、Nだけに部落の中の家に寝起きさせるようにしてしまつたのは、私ではなかつたか。Nは、年寄りには部落うちには危ないし、危急の時に逃げ出すことが困難だからという理由で、祖父をひとりぼつちにさせてしまつた。

祖父が一人だけ谷の奥の疎開小屋に移ることを了承し、村人が人気のない部落にN一人残ることをなんとなく黙認していたのは、Nの相手  
が他ならぬこの島の△隊長さん▽であったということによる。このよ  
うな二人の身分の違いは、この△愛▽の上に何の影も落さなかったの  
だろうか。背後に目もくらむばかりの権力をひかえ、島の運命を一手  
に握る、大日本帝国海軍中尉N浦隊長という「私」の地位は、この離  
島の一少女の心に何の影響も与えなかったであろうか。

少女はどのように隊長さんにかかわったか。

何だかズボンのあたりがつかめたいので、トエのからだをさぐると  
腰から下がびつしより濡れているのを知りました。びつくりして  
よく見ると腰のあたりに海草がくっついていました。トエがどん  
なにしてみても来たかがよく分かりました。胸がしめつけられる  
ように痛みました。足もとを見るとトエはだしになつていまし  
た。そしてあちこちに血がにじんでいました。(「島の果て」)  
トエは中尉さんに気付かれないようにあの小さな飾りのついた短  
剣を白い布に包んでしつかり持つてきていたのです。それを今、  
十字架のように胸に押しただいていたのでした。すつかり夜が  
あけてしまうまでトエはそこに居ようと思いましたが。もし何か  
海に浮んでそれが五十二の数だけトエの眼の前の入江を外海の方  
に出て行つてしまったときには、そのときもうトエもたくさんの  
石ころをたもとに入れて短剣をしつかり胸に抱いたまま海の中  
はいつて行こうと思いました。(「一同 右」)

ここに見られるのは一途な献身と殉死の姿勢である。この時この少女  
の自己はどうなっていたのだろうか。彼女は、この△隊長さん▽に自

分のすべてを捧げつくすことにより自分を生かそうとしたのであろう  
か。もしこの△隊長さん▽の中にこの少女を生かすものがあつたとす  
るならそれは何であつたのか。それは大日本帝国という観念であつた  
のか。それともこの島の守り神という幻想であつたのか。(注2)  
どちらにしても、少女の献身の対象が「私」個人にあつたとは考えら  
れない。少女にとって、「私」は島の△隊長さん▽であり、そしてそ  
れ以外の何者でもなかつたのである。

さて、以上のことから、この二人の△愛▽は次のような関係から出  
来あがつていることがわかる。① 離島の一少女は、自己を殺すこと  
によりこの島の△隊長さん▽に自分のすべてを捧げようとした。

② この島の△隊長さん▽にとっては、この離島の一少女は自分に献  
身すべき相手であり、△隊長さん▽がその任務を放棄してまでかわか  
るような相手ではなかつた。この関係は次のように言いかえることも  
できる。「私」は、大日本帝国海軍中尉N浦隊長として、島の一少女  
の自己を殺したと。またこれは次のように言いかえることもできる。  
「私」に体现される△近代日本||本土▽は、少女に体现される△辺境||離  
島▽を、殺し、呑み込んでしまうことによって存在を続けていた。「私」と  
は何か。それは、国家によって死を強制された存在、即ち△被害者▽である  
とともに離島の一少女に対しては彼女を△死▽へと追いやつた存在、即ち△加害  
者▽でもあつたのである。やがて戦争は終わり、「私」は生き残つた。その時  
「私」の心をとらえたのは、世界から死を強制されていなかつたの  
「私」つまり△被害者▽として存在していた「私」のことばかりで  
あつた。離島に対して△加害者▽として存在したあの「私」はどこに  
行つてしまつたのか。「私」はそのことを忘れてしまつたのだろうか。

それとも「私」は、「私」がかつて離島に対して「加害者」としてあったことすら気づかなかつたのであろうか。だが、戦争が終わって十年、彼は突如としてかつて果たした自分の役割「加害者」について手厳しい糾弾を受けることになったのである。彼の妻（それはかつての離島のあの少女であつたが）の突然の変身がそれであつた。

#### 四

何か冗談を言おうとすると、妻は唇のあたりにうつすら皮肉な笑いを浮かべ、「あなたもたーいしたもんね」と言つたかと思つた、急にげらげら笑い出した。私もつられていくらか笑つたが、不安がつつてきてそれどころではない。妻のそんな口調をきいたためしがないのだ。でも彼女は笑いを一向にとめようとしない。あまり笑つて、からだを起していることができなくなり、畳の上にもう一度引つくりかえると、からだをよじつて笑いつづけた。私の不安はどす黒くなつてきた。（「家の中」）

妻の病氣はこうして始まつた。外に女をつくり家庭をかえりみなくなつた夫の帰りを待ち侘びていた従順な妻の心の中で、一体何が起りはじめたのか。

「この手もこの足もみんなあたしが養つて作つたんだ。あたしが栄養に気をつけないければ、あなたはとうの昔に死んでいました（略）それなのにあなたはこのあたしというものを捨てて勝手なことをしていたのです。それもひと月やふた月じゃないの、十年ものあいだよ。がまんしてがまんしてきたのに、とうとうあたしは駄目になつてしまいました。（「死の棘」）

妻は報いられることのなかつた自分の過去を嘆いているのだ。それにつけても、この妻と夫の関係は、十年前の離島の少女と「隊長さん」とのあの関係にそっくりではないか。ところで、「とうとうあたしは駄目になつてしまいました」という妻のことは、具体的には何を意味しているのだろうか。

私が愛しているという事は一体何なのか、愛されていないという事は、ただ虫けらの如くあつかわれていた事は、私はころころを持たない虫けら同様にあつかわれてきた、金でもできたらやつておけばよいとあつかわれて来た、それでは、私のころころは、肉體は、生涯、生けるむくろか、虫けらか……（「崖のふち」）

これは「私」が台所の水屋の中で偶然見つけた妻の書き付けである。気が狂つた妻がここで主張したことは、自分は夫によって殺された、ということである。夫によって殺されたとは、もちろん身体的な意味での死を言うのではない。精神的な意味でのそれである。もう少し詳しく言えば、死んだのは彼女の心の中の、夫と現実的な応対をなしている自分である。夫がやさしさを示せば、それを自分に対するやさしさだと受けとり、夫へやさしくほえみ返す自分である。あるいはまた、自分が夫へまごころを示した時、夫がそれを受け入れたとか無視したとかを判断する自分である。つまり、ここで彼女が殺されたと思つているのは、常に他者に影響を与え、また他者からも影響を与えられている自分である。（これを現実と接触している自己という意味で、現実的自己とよんでもよい）そして、彼女はこれ以上自分を失えばもはや自分が自分でなくなるぎりぎりのところ（これを

△人間の核△あるいは△真の自己△とよんでもいいに立って、自分が自分であり続けるために夫にむかって必死の働きかけを開始したのである。(注3)もしこの△真の自己△が粉碎されれば、彼女はもはや人間であることをやめなければならなくなるであろう。妻をこまで追いつめたもの、それは、直接的には「私」の浮気であったかもしれないが、その根源は遙かな戦時中の「私」と妻との結びつきにあったのである。かつて「私」は△隊長△として妻を殺した。そして今、△夫△として妻を殺したのである。そして、戦時中も戦後の生活の中でも引き続き変わらなかったもの、それは、「私は十年もつれそい二人も子どもを産ませた自分の妻を見ようとしなかったことをおそろしいと感じはじめている。(「崖のふち」傍点||横山)」という「私」の姿勢であった。

さて、△自己△を失った妻は「私」に対してどのような態度をとったであろうか。

「いや、さわらないで。あなたみたいなきたないひと。けだもの、いぬちきしよう」

そう言い、憎しみで目を光らせているのが、闇の中でもはつきりたしかめられ、自分にも冷いふるえが起ってくる。(「死の棘」)まず妻が「私」に見せたのは、「私」に対するすさまじい憎悪の目であった。ここには、自分の自由を奪い、自分を窒息させ、自分が一個人の人格として生きのびてゆくことを許さなかったものに対する、存在の根源から発する憤りと憎悪とがある。しかし奇妙なことがある。それは次のようなことである。

妻は私にどのように毒づいても私のそばを全く離れることはできない。離れることができないことが分つていて、充分手許に私を引きつけて置いて、発作を起し、私をぼろきれのように叩きつける。(「われ深きふちより」)

「私」に対する憎悪の念が強ければ強いほど妻は「私」から遠ざかりたがると考えるのが、ふつうであろう。そうすると、この「私」から離れられないという妻の態度は矛盾してはいないか。また次のようなことがある。

私は血迷い、いきなりたんに頭をもつて行つてぶつめた。にびい音がして頭の中いっぱいに痛みが広がった。もういちどぶつけようと思ひ、すぎつて身構えると、妻が、

「ばかなことをするのはやめなさい」

と叫んでからみつき、しばらくもみ合っているうち、若々しい気分にとらわれ、二人は抱き合つた。(「死の棘」)

「私」が死ぬまねをすると妻は必死でこれをとめようとする。妻のこの行為は、彼女の「私」に対する憎悪の念と矛盾しているのではなからうか。

一体なぜ妻は、「私」を憎悪しながらも、「私」から離れることができないのであろうか。それはこのように考えられる。妻の「私」に対する憎悪と愛着とは、妻の△自己△が「私」によって殺されたといふところから動き出した、自己(真の自己)保存の本能の働きの、二つの側面である。憎悪について言えば、それは自分を殺したものの文字通りの憎悪であるとともに、憎悪というパイプを通して△現実的自己△を回復しようとする本能の働きでもあるわけである。もし彼

女が「私」に対する憎悪をやめたなら、彼女は現実には復讐する手がかりを全く失ってしまうことになったであろう。一方、愛着については、それは次のようなところから発生する。彼女を殺したのは「私」であるが、そのことによって、「私」は彼女のすべてとなった。つまり「私」の望むことは彼女の望むことであり、「私」の判断は彼女の判断でもあった。彼女即「私」なのである。そうなれば、「私」なくしては彼女の存在はない。だから、「私」を失うことは彼女にとって自分自身を失うことであつたのだ。これが、彼女が「私」の自殺をひきとめたり、「私」のそばから離れられなかったりする理由である。

さて、彼女が「私」にとつた態度でもう一つ目立つことがある。それは飽くことのない執拗な、そして論理一貫した尋問である。何のため尋問か。

「へえ、不服を言わなければそれでやつて行けると思っているの？ それにあなたはそこから五百円貸せ千円貸せといつて持ち出したのですよ。そのお金はどこに持つて行つたのかしら。あなたあいつに毎月いくらずつやつつていたの」

「お金などやらなかつたけど」

「またうそをつく。貯金を一万円もおろしたことがあつたわね。あつし通帳を見たわよ。でもあつしはその中からびた一文だつてもらつたわけじゃないんだから。なにに使つたのよ」

「……………」

「はつきり言つてごらんなさい。うそはいやよ。うそはつかないと誓つたでしょ。ほんとね、あなたがそれを何に使つたかぐらいはちゃんと知っているんだから。あつしが、何でも知つていて

ふしぎでしょ。でもあなたの口からそれをきかなくちやならないの」

「……………」

「言つてごらんなさいよ」

「……………」（「死の棘」傍点横山）

妻が尋問するのは、けつして事実を明らかにするためではない。事實はちゃんと調査して知っているのである。妻の目的は、どうやら「私」の口から直接に、「私」が誤つていたことを言わせることにあつたらしい。何のためにだろうか。「私」が自分の犯した誤ちを妻の前で認めるということは、妻にとってどういう意味があるのだろうか。

妻は「私」のもとに全般的な屈従を強いられてきた。「私」はあの戦争時から戦後の今日にいたるまで、常に彼女より一段優れた存在であつたのだ。△偉大な▽△隊長さん▽の前に、彼女は自分を主張する場所を見出し得なかつたのである。だから△隊長さん▽の△偉大さ▽が崩れるということは、彼女にとって自分の生き場所が生まれるということに他ならない。つまり、彼女にとって夫への尋問とは、失われた△自己▽を回復すべき、自分自身の全存在をかけた闘いに他ならなかつたのである。彼女の闘い、それは、長いあいだ△近代日本△本土▽によって屈従を強いられてきた△辺境△離島▽が、自己のよつて立つべき基盤を求めて開始した本土への闘いでもあつたわけである。

## 五

さて、「私」を憎悪しながらも「私」から離れることのできない妻の心は、これで分かるとしても、これほどひどいめに会いながらも、

「私」が妻から離れてゆかなかったのはどういう理由によるのだろうか。「私」はこのように言う。

私は妻の泣くすがたを見て、両親から捧げるように愛撫して育てられた、たつた一人の大事な娘を、ふるさとの島の不自由のない境涯から無理につれ出し、東京の片隅のやせた貧しい生活の中に放置して、絶望させたのだと思わないわけには行かない。

#### （「死の棘」）

ここから考えれば、「私」が妻を見捨てないのは、「私」の妻に対する罪の意識からだと思われる。またある人は、妻への深い愛情からだとも言う。（注4）しかし、わたくしにはそのどちらとも思われなないのである。そのどちらでもないもっと深いなにかがあるような気がする。

「私」と妻とは何によって結びついているか。△現実的自己▽を殺された妻の姿は、死を強制されていたかつての「私」の姿に他ならない。その時「私」の抱いた不条理の感覚が、その後の「私」の生き方のすべてになったことを考えれば、今この妻を見捨てるということは戦争時の、そしてそれに続く戦後の自分の内面史のすべてを見捨てるということに他ならなくなるのである。△自己▽を失った妻は、現実との生き生きとした接触を保つことができなくなっている。彼女はただ憎悪によって「私」につながるだけである。同様に、戦争中の「私」は、ヒットラーやムッソリーニと同時代に生きているという現実感を喪失してしまっていた。彼女が今陥っている場所は、かつての「私」が陥っていた場所でもあったのだ。さらに、妻にとって、「私」とは、自分を△死▽に追いやった不条理な世界そのものである。「私」もか

つて死に追いやられたことがあった。その時「私」を死に追いやったもの、それは具体的には△国家▽とよばれるものであったけれども、「私」はそれを「誰か」との「約束」というふうに考えた。「誰か」と

は誰なのか。「私」はそれをこの△世界▽そのもの、「私」の力ではどうすることもできないこの不条理なる世界そのものと考えたのである。ところが今の「私」は、かつて「私」に死をおしつけた、その

△不条理な世界▽そのものになっているではないか。もしそうだとすれば、「私」が妻から逃亡するということは全く不可能なことになってくる。なぜなら、「私」が妻を見捨てるということは、「私」がかつての「私」の存在を認めなくなるということであると同時に、それによって自分が死な直面させられたところのものそのもの、つまり△不条理な世界▽そのものの消失を意味するからである。

かくして「私」は、病める妻からどのようにしても逃げだすことのできなくなっている自分を見出したのであった。それを「私」は次のように言う。

すべての自我が根こそぎに押し流されてしまったあとに、ようやく自分を支えていられるのは、自分はだまされたかもわからない側に居たという考えだけなのに、しかし妻や子どもに向つては私の結果としてだましていた加害者の姿勢を否定できないことが、取りかえしがつかない。（「死の棘」）

あの時と今とでは世界は逆転したのか。いやそうではない。島尾敏雄の「死の棘」までの十余年の歩みとは、被害者であると同時に離島の少女に対しては加害者として存在したかつてのあの自分のありようを、戦後の生活の中ではっきりと確認してゆく過程に他ならなかつ

たのである。

六

さて、妻に対して「加害者」として存在した自分は、どのようにしてその罪を償ったのであろうか。

昭和三十年、島尾敏雄は家族とともに奄美大島名瀬市に移った。夫人の病気の治療のためである。とうてい直らないと思われた夫人の病気は、家族とともに故郷の島に還るということによってどうやら治癒したようである。それとともに、戦争以来続いてきた「私」と妻との関係はここで逆転したらしい。

「あなたはこの島のことにはなんにも知らないわ。島のひとは誰もそこには行かないのよ。そんなところにわざわざ行くことはないわ」

「この島はとつてもせまいけど、泊にはいりこむと出られなくなるところがいつぱいあるわよ。それこそたいへんよ。それにお日様はまだ高いけど、沈みはじめると早いよ。すくとんと海の中にはいつてしまふんだから。そうなつてからはもう何んにも見えないの。あたしは道のところにもどつてバスの様子を見て来ます。だからあなたはここで待つていてくださいね。いいわね」

(「同右」)

この島においては、主導権を握っているのは妻であり、「私」は妻の指図に従うばかりである。妻は生き生きと活動する。これが十年の苦闘ののち、「私」と妻とがたどりついた境地であった。かくして二人の間の戦争は終わったのである。「私」は、かつて自分が抑圧し殺し

てきたところの「離島」に対して、自分自身を「人質」としてさげることにより、妻と真に結ばれようとしたのである。「私」の試みは成功し、二人の間には平穏な生活が訪れた。

こういう島尾夫妻の辿った道は、今日に生きるわたくしたちにどんな問題を投げかけているのだろうか。「人質」となった今の「私」は「本土」でもなければ「離島」でもない。「私」が「離島」に入りこもうとしても、島は「私の介入を拒否している」。(注5)。

これは、「人質」の苦悩でもあるしまた特権でもあろう。かつて「本土」そのものであった「私」には見えなかった「本土」の持ついやらしさ。「離島」自身の内部にありながら「離島」の手によっては対象化できなかった「離島」の持つ価値。「私」は今その双方を見とおせる位置にいるのだ。

桃源境などといえば誤解を招くが、ぼくがいたいのは、もうわれわれには見失われてしまった「生命のおどろきに対するみずみずしい感覚」をまだそのように残している島が、この不毛の列島の中に残っていたということだ。

日本国中どこを歩いても、同じような顔付と、ちょっと耳を傾ければすぐ分ってしまうような一本調子の言葉しか、ないということは、すべてのものを停滞させ腐らせてしまわずにはおかない。ここでは鉄面皮なおせっかいと人々をおさえつけることだけが幅をきかす。おそろしく不愉快なひとりよがりやと排他根性。違ったものがぶつかり合って、お互いに骨を太くし、豊かな肉をつけるという張合から、われわれは見離されていた。いや沖繩を再発見するまでは。」(「離島の幸福 離島の不幸」)

「私」は今新しい何者かになろうとしている。△離島△に対する△加害者△であった「私」は、△離島△に対する△人質△となることよって、△本土△と△辺境△との交わるところから生まれ出る問題の新しい発見者となったのである。これが、妻に対して払った「私」の償いへの報酬であった。

さて、戦争が「私」にもたらしたもう一つの問題、△被害者△としての「私」の問題はどうなったか。

「私」は△死△に直面させられた。もし「私」が、自分を△死△に追いこんだものは△国家△であるとはっきり認識していたならば、その後の「私」の取るべき姿勢は定まっていたのではないか。ところが、「私」は自分の△死△を、「誰か」との「約束」というふうにかえたとひじょうにあいまいな考えである。それゆえ、「私」の△死△はどこからきたのか、「私」はなぜ死ななければならないのか、という問題は明らかにされないまま終わった。だから今、「私」にあるのは、自分がかつて△死△に直面し、そこで奇妙な世界を見たという事実だけである。島尾敏雄は今でもこの事実を拘泥しているようである。なぜか。それは、わたくしたちを取り巻く世界は、今もあの時も変わっていないからである。「私」は依然として死にゆく存在であり、その△死△がどこからくるのか、またなぜやってくるのかを明らかにし得ない存在である。だとすれば、島尾敏雄にとって△戦争△は今もなお続いているということになる。

注1 「……二十九年からおかしくなりましたね。入院させたのが二月でしたか、それから四月まで約二ヶ月ですな。」

（対談「島尾文学の鍵」△どこに思想の根拠をおくか△筑

摩書房）

注2 島の娘の「私」への献身について吉本隆明は次のように言っている。「『私』は奄美の少女にとって△マレピト△とおもわれている。いいかえれば、『私』はあるときは他郷からやってきた△島の守護神△であり、あるときは、座敷に招じいれられて少女から饗応をうける客人である」（「島尾敏雄の世界」△群像△四十三年二月号）

注3 島崎敏樹は自我を大きく「自我」と「客我」とに分けている。（「感情の世界」岩波）そして「自我」を「眺めるのみで眺められないもの、外へとりだそうとすればいくらでもうしろにしりぞいてゆくもの、つねに流れていて止めかためることの絶対にできぬもの」と説明する。そして「客我」を「そこにだせる心とからだ」とよぶ。わたくしの言う△客観的自己△と△真の自己△は、島崎氏の言う「客我」と「自我」に相当するものと思われる。

注4 「夫はひたすら妻をなだめすかそうとするのであるが、妻の追求が、次第に分烈<sup>(マ)</sup>症状的傾向を呈しはじめ、隙をうかがっては自殺しようとして、鉄路の近くをさまように至り、その原因が自分にあるという悔恨と、妻に対する深い愛情の自覚から、ひたすら看護につとめる。妻とともに奄美大島に移住したのも、おそらくそのような決意の延長であろう。」（山本健吉「戦後小説集」解説筑摩書房）

注5 そこにくりひろげられている生活は、映写幕の上では確かに存在しながら一瞬にして永遠に過ぎ去ってしまう選ばれ

た輝かしい映画の中の生活のように私の介入を拒否して  
いる。「〔島〕」

一九七二・九一